

令和6年度 小豆島オリーブ検定(’24ビギナー検定 小豆島会場) 正解表

設問	正解	テキスト 記載P	解 説
問1	3	p.68	オリーブ栽培の起源には諸説あるが、約6,000年前に小アジア地方で始まったというのが現在の定説である。
問2	2		
問3	1		
問4	3	p.8	日本に初めてオリーブオイルが持ち込まれたのは、約400年前の安土・桃山時代であり、当時キリスト教伝道のため来日したフランシスコ派のポルトガル人神父が携えてきたと言われている。
問5	4	p.9	文久2年および慶応3年に医師、林洞海の献策によって医薬品用オイル生産を目的にフランスから苗木が輸入された。
問6	2	p.11～p.12	明治37年から38年(1904年から1905年)の日露戦争により、北方海域に広大な漁場を獲得し、膨大な量の魚介類の水揚げが可能となった。その魚介類の保存、輸送の手段として油漬けの方法が採られ、これに使用するオリーブオイルの国内自給が求められた。
問7	1		
問8	2	p.11	神戸オリーブ園で、福羽逸人による管理が好成績を収め、明治15年(1882年)に果実が収穫され、日本で初めてオリーブオイルの採取及びテーブルオリーブの加工が行われた。
問9	4	p.10	佐野常民がイタリアからオリーブの苗木数十本を持ち帰り、東京と和歌山に植樹した。東京の苗木は枯れたものの、和歌山に植えられた苗木は順調に育ち、実を結び、これが日本で初めて実ったオリーブとなった。
問10	3	p.12	明治40年(1907年)に農商務省が、三重・香川・鹿児島県の3県を指定し、翌年それぞれ1.2haの規模で試験栽培を開始した。
問11	2	p.75～p.76	ネバディロ・ブランコは、明治40年(1907年)に、ミッションとともにアメリカのカリフォルニア州から導入された。
問12	1	p.15～p.16	オリーブ樹の自家不和合性の解明や苗木の育成法の確立など、オリーブ栽培進展の障害となる多くの問題点を解決し、日本におけるオリーブ栽培の基盤を構築した。
問13	2	p.12	福家梅太郎は、香川県農事試験場の初代場長であり、小豆島にオリーブを最初に植栽した。①は野呂葵巳次郎、③は佐野常民、④は尾崎元扶の記述。
問14	4	p.30～p.31	香川県農業試験場小豆オリーブ研究所では、オリーブの栽培技術の確立、優良品種の選定や品種の保存などを行っている。平成28年(2016年)度より公的機関では初めてオリーブオイルの官能評価業務も行っている。
問15	4	p.23～p.24	平成22年(2010年)度に歴史あるオリーブ産地を守り育て、「小豆島」のブランド力を高めることを目標に小豆島オリーブトップワンプロジェクトを立ち上げた。
問16	3	p.23	平成20年(2008年)、小豆島町では商工観光課内に設置していたオリーブ室を課に昇格させた。
問17	2	p.17～p.18	昭和34年(1959年)に始まった、オリーブ製品の輸入自由化により、諸外国の安価なオリーブオイルやテーブルオリーブが大量に輸入されるようになり、国内のオリーブ価格は低迷した。
問18	2	p.19	昭和40年代以降小豆島で生産の主流となったオリーブの「新漬け」が未発酵タイプの漬物であり、海外からの輸入が困難であることから高値での販売を維持できたため、小豆島のオリーブ生産は生きのびることが出来た。
問19	4	p.33～p.34	昭和61年(1986年)には約33haまで減少したが、平成29年(2017年)には小豆郡全体の栽培面積が約143haとなった。
問20	1	p.40	オリーブ樹は、モクセイ科、オリーブ属に属する常緑樹である。

令和6年度 小豆島オリーブ検定(’24ビギナー検定 小豆島会場) 正解表

設問	正解	テキスト記載P	解 説
問21	3	p.41	花芽は、3月下旬頃に形態的に分化、以後急速に花器を形成し、5月中旬には花器が完成し、5月下旬から6月上旬にかけて開花する。
問22	4		表面は厚い透明のクチクラに覆われて光沢のある濃緑色、裏面は密生した毛茸で銀白色になっている。
問23	4	p.42	自家不和合性とは、おしべ、めしべが健全でありながら自家受粉では受精できず、結実にくい性質のこと。
問24	4	p.75～p.76	ネバディロ・ブランコは、自家不和合性が強く、不完全花が多発するが、花粉が非常に多いため、受粉樹としての価値が高い。
問25	3	p.74～p.75	マンザニロは、果実が炭疽病に弱く、果皮や果肉が柔らかいため風害を受けやすい。テーブルオリーブ用に優れて収量も安定しており、さらに果実が大きく品質も良好である。
問26	1	p.73～p.74	ミッションは、アメリカから導入され、国内のオリーブ栽培のテーブルオリーブ用、オイル用兼用の最主要品種となっている。
問27	2	p.52	新漬けに用いられる果実(グリーンオリーブ)は、熟度の低い黄緑色の果実で濃緑色の果実が黄色味を帯び始めた頃が適している。マンザニロは、9月中旬から10月上旬が主要収穫期となる。
問28	3	p.44	気温については、年平均気温14℃～16℃の温暖地が適当とされているが、比較的低温には強い。
問29	4		日照量が多いほど生育がよく、年間2,000時間以上の日照時間が望ましい。
問30	3		オリーブは乾燥を好む植物とされているが、良好な生育、順調な果実の成長のためには、年間1,000mm程度の適度な降水量(灌水量)が必要となる。
問31	4	p.45～p.46	十分な保水力に富んだ排水しやすい肥沃地では収穫量、品質ともに良好で安定した生産を維持できる。
問32	3	p.45	冬から春先の平均気温が10℃以下でないと花芽が付きにくくなり、1月の平均気温が15℃以上になると着花しないといわれている。
問33	1	p.40～p.41・p.45	オリーブ樹は根がもろく、風害を受けやすい。またオリーブ樹は常緑樹である。
問34	2	p.70	オリーブの品種数にはいろいろな説があるが、国連食糧農業機関(FAO)の調査では1,275種が確認された。
問35	2	p.70～p.73	カラマタはギリシャ、フラントイオ、モライオロはイタリアの代表的な品種である。
問36	4	p.47～p.48	①栽培開始時からわずか2年後にはその存在が確認されている ②存在が確認された当時は象鼻虫(ゾウビチュウ)と呼んでおり、オリーブアナアキゾウムシという名称で呼ばれるようになったのは昭和24年(1949年)からである ③成虫の生存期間は3～4年間
問37	2	p.48	オリーブアナアキゾウムシの防除に際しての薬剤散布の1例として、スミチオン乳剤の50倍液を使用する。
問38	1	p.51	マエアカスカシノメイガはハマキムシとも呼ばれ、幼虫はハマキの名のとおり、葉の先を糸で巻き込むのが特徴である。

令和6年度 小豆島オリーブ検定(’24ビギナー検定 小豆島会場) 正解表

設問	正解	テキスト 記載P	解 説
問39	4	p.49～p.50	幹に5～25mm程度のコブを形成する病気は、オリーブがんしゅ病である。細菌の一種が傷口から侵入することにより発生し、樹全体が枯死することはないが、落葉や枝枯れを起こす。
問40	2	p.49	炭疽病の予防策の基本は、圃地内の日当たり・風通りを良好にすることであり、密植を避け適度な剪定を行うとともに、水はけの悪い圃地では排水路を確保することが大切である。
問41	3	p.54～p.61	オリーブオイルの主な採油法は、圧搾法、遠心分離法、パーコレーションの3つである。現在、小豆島では遠心分離法のみで採油されている。
問42	2	p.61～p.64	バージン・オリーブオイルは加熱処理も化学処理も施さないオリーブの果実から自然のまま採りだすのが特徴である。
問43	2	p.59～p.60	マットなどの資材を使わないので、オイルが汚染される危険性が低い。
問44	4	p.87	『ファイン・バージン・オリーブオイル』は、現在の基準には含まれていない。1994年11月に現在の基準の『バージン・オリーブオイル(狭義)』に改称された。
問45	1		エキストラ・バージン・オリーブオイルは遊離酸度がオレイン酸換算で100g中0.80g以下で、官能評価では欠陥の中央値が0.0でフルーティの中央値が0.0を超えるものである。
問46	3	p.90～p.91・ p.95	オリーブオイルに含まれる脂肪酸のうち、オレイン酸は約55～83%を占める。オレイン酸は、代表的な一価不飽和脂肪酸である。
問47	4	p.91～p.93	カルシウムの吸収を助け、骨のミネラル化を促進することで骨粗しょう症の予防にもなる。
問48	1	p.20・p.26	県花は昭和29年(1954年)、県木は昭和41年(1966年)、島花・島木は昭和60年(1985年)に選定された。
問49	1	p.100	小豆島の美しい風景に魅せられ、小豆島のオリーブを日本に広く知れ渡らせることとなった画家は猪熊弦一郎である。
問50	2	p.26	昭和47年(1972年)「オリーブを守る会」が結成され、3月15日を「オリーブの日」と定めた。